

おおやまと

大倭出版局・大倭紫陽花邑

平成27(2015)年
8月号
通巻540号
毎月23日発行
(題字 矢追日聖)

★発行日 平成27年8月23日
★発行所 大倭出版局
〒631-0042 奈良市大倭町1の12
☎(0742)44-0015
★印刷 大倭印刷製
★定価 1部 250円
年間購読料3,000円(送料共)
★郵便振替 01050-6-67002
大倭出版局
URL <http://www.ohyamato.jp>



枯葉の間からほんの数日の花の命。葉は無く菌類から栄養をもらう。目には見えないけれど命の世界は精緻に巡る。

屋久島の照葉樹林で国内では初めて見つかった新種のラン。 屋久島 手塚賢至さん撮影 (関連記事・7頁)

再録 平成5(1993)年8月号『おおやまと』第276号より

あなたの清浄な心こそ、最高の先祖供養

平成5年7月23日 月次祭法話

法主 矢追日聖 (満81歳)

平成5年8月23日月次祭では法話はなく、法主様は「同じような話をしようと思っていたので、7月の法話を載せた『おおやまと』を読んでもおいてほしい」と言われました。今回はそれを訂正加筆の上、再録しました。文末の注は法主様ご自身による補足です。(編集部)

うらぼん 盃蘭盆

皆んなオボン、オボンというてはるけれど、これは丸いお盆のことやないです。お盆というのは本当は、人間が足をくくられて、逆さまに上から下につるさされている、その苦しみという意味です(注1)。日本でお盆というてるけれど、これはインドの話でネ。私は見に行った訳やないから知らんけれど。

なんか昔、お釈迦さんには、言い伝えでは十人の弟子がおつたらしい。その弟子の一人に目蓮尊者という偉い人がおつて、その人が自分の母親が霊の世界で何をしているか見たときにネ。(注2)

霊の世界では非常に苦しんでると、つまり餓鬼道に落ちていらっしゃるらしいんやネ。目蓮のような偉い人の母親でも……。

私はどんな母親か知りませんけどネ。

霊の世界でもやっぱりものを食べているんやネ。ところがその母親が食べようと思うと、その食べようとする食物からすぐ火が出てきて燃えてしまつて食べられない。体は骨と皮だけになって腹がふくれてしまつてネ。餓鬼の姿になっておるんやネ。

それで目蓮尊者がお釈迦さんに、苦しんでる母親をどないしたら救うことが出来るんか、きいたらしい。そしたらお釈迦さんは、そんなものどてもじゃない、救うような道はないというて、断わられたらしいけど、たってお願ひした時にネ。何とこのか忘れたけれど、インドには修行僧が、何千人か何万人か、行をする期間があるんですネ。そこにいる何千人かの僧侶全部に食べ物を供えて、回向供養をせよというようなことでネ。

目蓮さんという人はどれだけお金を持ってはったのか知らんけど、供養はしたらしい。

そしたら何とか食べられるように助かったというような物語なんです。ホンマかウソかは私は見えてきた訳やないから知らんけどネ。

あんた達もお盆いうたら、供えものしたりしませんでしたも、盂蘭盆会という行事は死んだ人の苦しみを助ける行事なんです。

インドの方から中国、朝鮮を通過して日本へそういう話がきているんやネ。

日本では奈良朝から平安時代にかけて、そういうものが盛んになってきているんです。

お盆やから皆さんの先祖も十三日から何か知らんけど帰ってきはるということになっていて。浄土宗なんかでは十万億土に先祖さんがいてはって、この日に帰ってくるなんていいいますネ。

とにかく日本の仏教には色々宗派が出てきております。仏教の教典も華嚴・阿含・法華・涅槃…何んかお経の教えがぎょうさんあるんです。

そんな中のええとこ採りして坊さん説教して、宗派をつくってはるねんけどネ。

お釈迦さんが自分で書いて遺しておかしたお経は一つもないんですヨ。ただ十人程弟子がおつて、あつちへ行つては説教し、こつちへ行つては話を色々とはつたらしいけど。

まあまあ、お釈迦さん八十位まで生きてはったんやろうけど。お釈迦さんが成道に入って悟って八十までやから、生きてる間というのはホンのわずかですヨ。その間あつちこつちと廻つた事蹟はあつたと思うんやけれどネ。

お経自身はお釈迦さん一つも書いてない。あの弟子達が後の世にお経をこしらえたんです。

お経のはじめには漢字で如是我聞とか我聞如是とかね、書いてあります。我かくの如くに聞けりということですよ。

お経は仏弟子の主観

お釈迦さんの教えを書いた人がどう受けとらしたんか、お経は書いた人の主観やからね。

だから私みたいな頭の固い人間は、そんなお経みたいな信じられへんの。

お釈迦さん自身やなしに弟子のいうたことやからね。ホンマやウソや分らんし、弟子がとらえたお釈迦さんは出てくるかも知れんけれども、本当のお釈迦さんは分らない。

禅というのは私らにしてもいいんでネ。教外別伝というて、お経に頼らないの。坐禅をして冥想に入つて、そしてお釈迦さんの心と自分の心と交流することによって、釈尊の心をつかむという、それによつて悟るといのが禅なんですよ。まあ、禅宗のお坊さんも今は葬式しはるし、お経も唱えはるけれどもネ。

結論はネ。我々自身も肉体のある現界の世界と肉体がなくなつても自分の肉体の中に入っている生命体、まあいうたら靈魂と、この二つがあるねん。

例えば、今日大倭は月次祭やと、だから大倭へ行こうかという見えないひとつの命令するやつが

横におります。それによつて皆さんも時間を決めてこうして集まつて来てんねんからネ。

肉体が後から出てくる、心が先やわネ。そういう二つがある。

我々肉体がなくなつても自分の靈魂というか生命体は残っている。生命体は永久に消えるもんでも、なくなるもんでもない。生きてる三十年あるいは五十年の人生の経験をした同じような経験を持つて、又霊の世界で生活していますね。その生命体のことを私は肉体の持たない人間といたい。この世の中にこの二つがあるんやネ。

私達が幸せに生きたいと思うなら、肉体のある我々も肉体のない霊界の人達も両方が幸せでなければ、うまくいかない。

こらまあ経験上、霊界の人が出てきて私にそういうてくるから私は話しとるんやけれども。

最近皆さん方もご存知のように、新しい宗教がたくさん出てきております。

そんな宗教の教祖という人の中には、自分は唯一絶対神であるとか、メシアであるとか、そういうことをいうエライ人おりますワ。私びつくりして生れてきて、衆生済度とか人類救済とかネ。そんなこと口に出しよる。まあ、私ら首ちぎれてもいえんことですよ、それは。

けどそんなこという人も我々と同じ人間や、メシも喰うて、クソもこいてる。何かいうたら腹もたてはる。メシアみたいなものめつたにやらへん。けどそんなこという人おるねん。こんな人もいるねんなあと私は感心してます。

私も今、こんな大倭教なんてアホなこというてるけれどネ。今の日本は法治国やから宗教法人というものを作って、そして自分のお役目だけを果たせと霊界の方からいわれているから、宗教法人

大倭教というこんなものを作っているけれども、私はこんなものキライや。作っても作らんでも一緒や。私はあんた達がここに来とったかて、誰一人世間でいう信者とは絶対認めていませんヨ。だから私は教祖でもなけりやメシアでも何でもない。

また、宗教によつては、あんたは誰々の生れ代りとかアホなこという人がおる。そんな生れ代りみたいなもんめつたにないんや。ところがそんなこと言われてのぼせ上つて一生懸命信仰しているアホもおるんや、世の中に。こんな悪いこというたらイカンけど、私の気持をいうたらネ。

そんなんでおだてられてトドのつまりは不幸になつてしまふんや。

宗教の教えはネ。これは仏教であつても、神道であつても道教であつても、陰陽道であつてもネ。教えというものは何かの根柢をもつて教えているんやから、非常に有り難いし、立派だし私は皆尊敬しています。

尊敬しますけれども、日本のような宗教が一つの大きな団体をつくる、何万の信者があるとか、こういうことはもう墮落ですヨ。宗教の冒流ですヨ。一つの団体が出来てしまうと、一番先に出てくるのが団体の自我。仏教では我を^がとれと、自我をはずせというのが教えなんだけれど。我が出る^がと自分が信仰してる宗教、これが一番いいんやと、有り難いんやと、自分の宗教以外のところは皆んなダメなんだという差別感が出るでしょ。

どこかの宗教団体に入って、自分と^こが一番いいと、唯我独尊の考えでやつてもネ。自分の生活がダメになったら、その教団が救うてくれるかいうたら、めつたに救うてくれませんヨ。

私なんか、唯一絶対の加美さんというようなもんからの教えなどはありませんヨ。

加美といつしかない

自然神と人格神というものがありませんからネ。地球も何十億年前に創られた。この宇宙を創成したもの、自然の摂理というか、我々ではどないも出来ん自然の力によつてやネ。我々人間も生れてきて、ある一定の旬がきたらまた殺されてまう。

今、そこに木槿の花も咲いてますけれども、これもちよつと冬になったらあの花は皆んななくなつてしまふ。これは我々が毎年経験を積んでるから、又来年も咲くやろうと思つていられるけれども、一体誰が咲かせているのかというと、自然の流れですわネ。それは加美さんといわなけりや、表現のしようがないんですヨ。この宇宙の大加美さん人間もこの中からわいてきたもんです。

私自身に霊界から指示があるとか、カミさんというてるとかいうことは、これ全部人格神が色んなことをいうてくるんです。昔の人間さんにも偉い人がたくさんおるねん。その人達も肉体持つてこの世に生れて、又靈魂だけ残つて現在まできている。

宗教の形において私がやっていることは、聖徳太子の心の通りやつてますねん。聖徳太子という^がと皆さんご存知のように仏教と思うけれどもネ。

私といつも話しているのを聞いてると、仏教もあるし、道教もあるし陰陽道もあるしネ。中国から出てきた思想を太子さんはほとんど皆持つてはる。だから私が神ながらの話をしてるもネ。その中には仏教的な要素も道教的要素も陰陽の道理、そういうものが入つていてると思う。

私にいろんな指示してくるの人格神ばかりなんですネ。ここ拜殿に祀つておるのが稲田姫というお姫さん。このお姫さんは古いらしい。

このカミさんは国津カミ。日本の国土において生れはったカミさん。で、この人の婿さんがスサノオ命、このカミさんは天津カミさん。

天(アマ)というのは海のことなんですヨ。

だから天津カミさんというのは海を渡つて日本国土に入つてきたカミさん。ううてみたらアメリカ人と日本人が結婚してるのと同じことなんだ。

その中で生れてきたのが、ニギハヤヒ命という人。この人は大倭神宮の方で生れてはるねん。この人の別名が大国主命とか大名持命とか大物主とかたくさんある。このカミさんの働きによつてつけられた名前なんですネ。

こういうカミさん達はこの世で食べてクソこいてきはつたんやから、私に色々指示してきて人間に合つたようにいうてきはる。

先ず、信者はつくらんとけといわれた。寄つてくる者はいいんですヨ。自分と同じ立場の仲間と思えという。そしてお互いは皆んながそれぞれ特徴を持つてきてると、その自分のお役目というものをお互いに出しあつてネ。助けあうて皆んな仲良くいけど、聖徳太子はおつしやるんです。

聖徳太子は政治家でもあつたけれど、仏教もしつかりやらはつた。けど仏教界の弊害を霊の世界から見えてよく分つてはるねんと思う。それで私にそういうことをおつしやる。

だから私は何も高い所に登つてへん。お寺やつたらここから中は内陣というてエライ人が緋の衣着て上に坐らるるねん。けど、ここはそれはイカンといわはるねん。あんたら畳に坐つてるけど私は板間にいてんならん。そりやなかなか聖徳太子はそんなことは厳しいですヨ。

この拜殿を建てるんでも、皆んな寄付してくれてはります。寄付でもたくさん寄るようになつてと思つたら、誰々が百万寄付したとか、上にずつ

と並べて張ついたら「ああ、あの人があれだけ
ははたらいたら私はこれくらいせんならん」とかネ。
人間というのは、そういうことを考えるんだネ。
けれどこは、そんなものは何も無い。聖徳太子
がおっしゃるのはネ。そんなことしたら、せつか
く心で寄付してくれた人の好意というものを、
「誰々はいくら寄付した」というような心で見
てしまつて寄付した人の徳が失くなるといわれ
る。かえつて可哀想やと、だからそういう惨めなこ
とはするなとネ。

そういう点では、私は霊界の人のおっしゃるこ
とにはアホ程素直やねん。それでこそ今まで命あ
るねん。逆らつたらとうの昔に命なかつたやろけ
どネ。霊界にも悪魔もおりや、どんな人もおる。
けどやっぱり聖徳太子とかはネ、エライ人ですヨ。
大倭で福祉の施設をつくるというのも、光明皇
后さんの願ひなんです。

奈良に大仏作つたり色んなことした時に、全国
から色んな人が奈良へ出てきた。仕事が終つて郷
里に帰る時に病気になるつたり行き倒れたり、死ん
だりした。そんなことあつたんで光明皇后さんは
悲田院や施薬院を作つて救済事業をしたけれど、
あんな大きなお寺つくつたり余計なことをして人
を苦しめたから、あれは本当の救済じゃないと。
やむをえずしたような意味のことをいわはるん
ですヨ、私には。

本当に自分の心に添うたような福祉の施設、救
済事業をやつてほしいって。そういう意味で私は
大倭安宿苑を創つたんです。

霊界人のいうことにはアホ正直なところを、霊
界人に見込まれたんかも知れん。

私は生きさしてもろたらそれでええねん。それ
より皆さんが仲良くしている雰囲気は好きや
ねん。皆平等に仲良くしていくという、その心が

あんだ達にもしあつたら死後の世界のご先祖さん
は救われます。

お盆やからいうてご先祖さんは、十方億士の西
方浄土から戻ってくるのと違いますヨ。皆さんの
血の一滴にご先祖さんの心が入っているんやから。
生きてる時の経験があるから死後の世界のご先
祖さんもメシは喰わんならん。だから現界の人が
形のを供えてあげるとご先祖さんも心で満足
できるんですヨ。

あんだ達も夢の中で、ものたべたら満足できる、
形がなくても。それと一緒に。

そうやって肉体を持っている我々と肉体を持た
ないあちらのくにの人とが、心と心の交流をする
ことによつてこちらの方も救われるし相手も救わ
れるんです。

最後の悟り

霊界の人を供養するにはね、生きてる我々の心
の状態が大事なんですヨ。

あんだ達自身が清浄な心になること、だから最
後の悟りはネ、般若心経にも説いてはる「空」の
世界。

あんだ達今考えてみて下さい。上に着てる服も、
化粧して紅塗つてはるけれどもこの顔の皮も皆ん
な自分のものと違いますヨ。一定の旬きたら皆ん
な焼き場で焼いてしまふんや。

それだからこの世の中に自分の財産とか不動産
とかお金とか、これが自分のもの、私のものでは
あるという物は一つもないんですヨ。

自分で「私のもの」があると思つていてるだけ。
あると思つて欲出しているだけであつて最終的に
は何もない。一番自分が大事にしている自分の肉
体ですら焼いてほられるんですヨ。これが現実や

で。ホンマやねんで。

皆んな消えるねんで、必ず。そういうような心
でもって日々生活するのが般若心経でいう「空」
の世界や。

けれども我々働かんとメシ喰えんし、お金な
つたら生活できません。自分の生命を保つための
欲、これは欲じゃない。加美さんが与えてくれた
当然のものであつてネ。権利なんだそれは。
生きさせてもらつてるんやから、生きる為には働
かなイカン。それは欲じゃないんですヨ。

最終的には皆さん方が、我がものは何もないん
やという、そういうような心になつてくれたら一
番結構なんです。その心で霊界の人、ご先祖さん
に——仏壇でもどこでもよろしい——お参りする
時自分の心がむかつていく、その心が死後の世界
の人の榮養になるんですヨ。
ところが濁つてる心で拜んでいたら毒喰うてる
のと一緒やねん。

先祖さんを拜んだ時、自分の心が清浄やつたら
その心をうけとる先祖さんには、それが上等のも
のをたべてると同じ形になるんです。

だから皆さんも日々そういうような心で、いわ
ゆる強欲というものをなくし、人を苦しめてまで
金貯めるといふような心をなくして暮らしてほし
い。

霊の世界のご先祖さんは、何も今日はお盆やか
らいうてお供養するといふようなことをしなくて
も、自分の心を清浄にして日々ご先祖さんと心と
心の交流をはかつていただければ、それで喜んで
はります。

そうしていれば、現界の我々の家庭もだんだん
いい方にむいていくし、霊界の人も助かる。これ
が本当の救済なんですヨ。

それを日々くり返してもらうのが一番よろしい。

なんば般若心経を唱えてくれても、心に欲を持つていたら絶対にあきません。

祈るといふのは、イは心のこと、ノルは伝えるということ、心伝えるのが祈り。

八月になってお盆の行事もあるけれども、せめて大倭にきたあんた達だけでも、ご先祖さんはどこにもおらへん、自分の肉体の中におるんやというそういう身近な気持ちで、ご先祖さんに対して回向供養してもらったら私は有り難いと思います。

私のしゃべることの一つでも理解してもらったら私はそれでいいんです。

たとえ一人でも私のいわんとすることを理解してもらったら、私がこの世に生れてきた使命というものは果たしていくことになるんです。

霊界の人はいつも、そういうんです。終ります。

(文責・編集部)

(注1)「仏説報恩奉養(ほん)経」より
孟蘭盆会(盆・精霊会)はサンスクリット語のウランバナニ甚だしい苦痛、倒懸(さかさづり)の苦しみの意。

(注2)「仏説孟蘭盆経」より
釈迦の十大弟子の一人、目蓮(もくれん)が餓鬼道におちた母のやせ衰えた姿を見て、鉢に食物を盛って与えようとしたが、口に入る前に火炭となった。救いを釈迦にすがって頼むと、重い罪だから釈迦は否定。

救うには、七月十五日の僧自恣の日(げあん)の終りの日。夏安居とは旧四月十六日から三ヶ月間僧が室内にこもって修行すること)に、十万の衆僧に百味の飲食を供養し、その力にすぎるほかにない悟された。

その教えに従って飲食を供え、衆僧は施主(目蓮)のため七世の父母の成仏を祈り、母の苦痛を救ったとある。

特集 戦後70年の夏に

記憶の現在

あじさい色 李 草 根

時々、両親から戦中戦後の話を聞く。

例えば父の育った姫路市広畑には捕虜収容所が数箇所あり、小さな日本兵が大きな米兵等何十人も捕虜を隊列をなして田んぼや川のあるところまで連れて行き、蛙などを捕らせていたという。

捕虜は広畑の(株)日鉄(現新日鉄)で働かされておりました。祖父はそつと自分の食料を分けてきたこともあったそう。また、朝鮮からの徴用工もいたよう。タバコに虫眼鏡で火をつけ吸っていたらしい。

そう言えば、北海道を旅していたとき、千歳の蘭越というアイヌコタン(アイヌの邑)で、アイヌ語を話される小田イトさんというおばあさんから、アイヌは朝鮮人の徴用工と弁当を分け合って助け合ったんだと教えて頂いたの思い出す。

終戦になり捕虜は解放され、若い米兵は消防車や乗りが回した。戦中いじめた者達を逃がさぬよう英賀保駅で待ち伏せていたともいいます。逆によくした日本人は戦後、米国に招待されたとも。

ある米兵達は父の家にもやってきて、ニンニクや赤唐辛子を分けてくれたので分けてあげると、生のままバリバリツ、バリバリツと食べたのには驚いたらしい。刺激物が足りなかったのだろうか。勢いよく口にしたのでウエウエと吐いてる者もいたそう。

いま、戦後70年ということもあってか、新旧の優れたドキュメンタリー映画が次々と上映されている。最近観たのは、ジョシユア・オツペンハイマー監督の『ルック・オブ・サイレンス』。1965年インドネシア。スカルノ大統領親衛隊の一部がクーデター未遂事件を起こし、軍部は事件の

背景に共産党があると決め付け、共産主義者と見なした100万とも200万人ともいわれる人々を虐殺した。今も加害者は権力ある地位に座り、被害者家族は沈黙を強いられるといえます。

メガネ屋を営む被害者の弟アディはオツペンハイマー監督らの協力を得て、長い沈黙を破り、命がけで、「あなたはなぜ、兄を殺したのですか」と加害者に問い掛けていく。静かに、ほんとに静かなたはずまいで。そこで語られたものと語る姿は実に恐ろしいものでした。嬉嬉として虐殺を誇らしげに具体的に語るのです。

日本では遅れて90年代に入って漸く上映された約10時間に及ぶ『SHOAHシヨア』は、ホロコーストの記憶を証言だけで構成した記録映画。アウシュビッツ強制収容所解放から70年を期に改めて上映された。

どちらの犯罪も対話を拒絶し誰かを悪者にする。ことで、考える力を奪い真実を覆い隠していく。何となく、いつの間にかデマが吹き込まれ人の心に浸透されていく。忍び足で繰り返し垂れ流されてくる情報や、大声でキャンペーンをはる言論には気をつけたい。作家村上春樹は、「何よりも恐いのは社会が品位を失っていつて、それが既成の事実として人々に受け入れられていくことです」(『村上さんのところ』より)という。

あるシンポジウムの中で、水平社宣言の「人の世に熱あれ、人間に光あれ」の英訳について、「Let there be heat and light」と訳されているが「heat」は「warmthあたたかさ」ではないかとの発言があったとき、この7月8日に帰幽された民俗学者・沖浦和光さんは開口一番、「甘い! そんなことでは差別というものは無くない!」と淡々と言われた瞬間、背骨に電流が走った。一体、人間とは何なのか?

特集 戦後70年の夏に

見えないものたちの力と共に

鹿児島県屋久島町 手塚賢 至

夏は暑い。当たり前だが今年のことさら暑い。猛暑日続きの炎天に心身が火照っている。

そして戦後70年の節目の夏を一層暑くさせているのは「戦争法案」(「安全保障関連法案」)と川内原発の再稼働だ。

もうじき8月15日、おのずと戦争と平和への想いを改めて確認せねばならない夏となった。ひとびとの自由を奪う国家統制を敷き、近隣国をも惨禍に巻き込んだアジア太平洋戦争。血と死であがなわれ敗戦の果てに得られた新しい憲法を握りしめるのか葬り去るのか、いまこそ試練の夏。立憲主義と平和主義を謳う「日本国憲法」と憲法九条が正念場を迎えている。

現政権は今国会で国会内与党の多数決、数の威を借りて首相自ら「国民の理解は得られていない」と言いながらこの法案を成立させる勢いだ。国会審議と政権周辺の政情から日々立ち現れるまるで戦前への復古を望むかのような、そしてまがりなりにも戦後70年間築いてきた「平和憲法」をなす崩そうとする姑息で空虚な言葉に、私の脳はますます熱くなる。

しかしこれまで押し黙っていたかに見えた多くの人たちが、今やまるでかがり火のように全国で法案成立に反対の声を上げ始めた。ことの真贋を見極め、人間性と幸福な生活を破壊する戦争や核兵器への本能的な拒否が人々の胸内に脈打っていると思う。この夏こそ冷静に戦争の実相を伝える声を聴こう。戦争とは何かを知り、謙虚に死者の

声を聴き、それも非業の死を遂げた人々の見えざる想い、聞こえざる声を聴きとる想像力が必要だ。そして戦争の無残さを直視し、平和の尊さを手放さないためにも、すべての人の心の奥底に宿されている良心を失わないでおきたい。

今回は私が近頃手にした新旧二つの本から戦争を知る手掛かりとしたい。戦後、戦争を体験した大岡昇平、島尾敏雄などにより優れた文学作品が数多く発表されたが、中でも私には野呂邦暢(1937年〜1980年)が大きな存在で好きな作家だ。1974年、自衛隊体験を描いた『草のつるぎ』で芥川賞受賞した後、惜しくも42歳で逝去。珠玉のような作品を多く残した。

先般、本屋で不意に新しく文庫に収まった『失われた兵士たち―戦争文学試論―』(文春学芸ライブラリー、元は1977年出版)が目にとまりこの夏じっくりと読んだ。これは作家唯一の評論で「文学の域にまで高められていないという理由で軽んじられ話題にもならず忘れ去られた書物の一群がある。私に取り上げたのはそのような本である」。そうして「五百冊を超える戦記を蒐集、読破し無名兵士たちが綴った言葉の数々と戦場の真実」に私は圧倒され戦争とは何かが感得させられた。何度も何度もページをおいて立ち止まりこれらの戦記、体験記のひとつひとつの文章の裏側に張り付いた、声を上げることもかなわぬままに死んでいった人たちの、隠された慟哭の音が著者の手を借り背を押していると思った。その見えぬ力がヒタヒタと読み手へと迫ってきた。

もう一冊は今年6月に出版の現在91歳、熊本で製茶業を営まれる吉岡義一さんによる上、下二巻からなる渾身の大作『霧の進軍―大陸打通作戦 湖南進軍―死闘1400km 一兵卒の壮絶な大記

録』(発行/「新老人の会」熊本支部)。本の帯には「なぜゼロの進軍か―この作戦では補給は零だった 兵士の頭は零だった 兵士の人格は零だった 兵士の命も零だった」として仔細が記される。これだけで私には衝撃が走る。これは中国大陸での旧帝国陸軍の戦闘、行軍の記録であるが、敵、味方を問わず消えゆくおびただしい命への哀惜と祈りの書だと思う。

最後にちょうど70年前の今、1945年8月9日、長崎から疎開していた邦暢少年が遭遇した、前著の冒頭に記された文章を引きたい。この日もよく晴れた夏の日。死者たちへのレクイエム。

「公前略」やがてどす黒い煙の塔が立ちのぼった。私は町はずれの岡へ駆けて行って西南の方を眺めた。黒褐色の煙の下際は赤い焔で縁どられていた。煙の下では私が生まれ七年間を過ごした家と長崎の市街があった。そこから二十四キロ北東に位置する諫早へ疎開して半年余り経っていた。昭和二十年八月九日の夜はいつもより早く訪れた。煙がくまなく空を覆い光を遮った。太陽は光を失いちっぽけな真鍮の円板にすぎなくなった。長崎の方から生臭い風に乗って布切れや紙の燃え殻があとからあとから漂ってきた。空はこれらの黒っぽい滓状のもので埋め尽くされた。不吉な夕焼けがひろがった。それは一つの都市が炎上する色でもあり、ひとつの帝国が瓦解する光でもあった。血をながしたように濃い華麗な夕映えが西空を染めた。私たちは声もなく立ちつくして赤い光を見つめた。(後略)

過去と未来を繋ぐ現在にあって、常に現世を生きるひとりひとりの人間には、未来への責任も宿されている。そのためには逝ける者の魂に寄り添い、見えないものとも語らい、新たな命への希望を託したい。

新こころとからだシリーズ(17)

信頼関係を数値化する技術

京都市 三宅 淳之

先日、林修三先生より電話をいただきました。『とおやまと』に心と体について何か書いてみないかというお誘いでしたので、今の私の訪問マッサージ師という立場で工夫していることを読者の皆様にお知らせし、何かの参考にしていただければと思っております。

今の私は患者さんの御宅に訪問し、患者さんが寝たきりにならないよう、マッサージや機能訓練をする毎日です。ただ訪問先の患者さんは持病のある独居の高齢者、老老介護のお宅などがあるため、実際にはそれだけにとどまりません。脱走した飼い犬の確保、網戸の張替え、トイレの鍵の修理、エアコンの掃除、オオスズメバチの巣の除去、自助具の作成、ムカデ駆除、詐欺対策、補助犬の散歩、障がい者就職支援、防犯装置の作成設置、お花見外出支援等々多岐にわたります。一時期、人から「『職業は?』と聞かれると「なんでも屋です」と答えた時がありました。あとの説明が面倒なので最近では素直に「マッサージ師です」と答える事になっています。

大変な事も多い毎日ですが、嬉しい事も多いです。例えば、数年間通っていたある患者さんが亡くなられた時の事です。かかりつけ医の先生から「〇〇さんが亡くなられた」とのお電話を頂き、お通夜の前でしたが直接ご自宅に伺いました。ベルを押し、深妙な顔で玄関を開けた私を見たご家族が、大声で笑われたのです。次の瞬間このようにおっしゃいました。「介護って大変なものだと

思っていました。本当に楽しかったです」と。よく見ると、そのご家族さんは泣きながら笑っていたのです。良いご縁をいただけたと私も思えた瞬間でした。勿論、どのような患者さん、ご家族ともこのような関係になれるとは限りません。

しかし、普段から信頼関係を高められるよう気を配っていなければ良い関係にはなれません。また信頼関係というものは一度でも構築できれば良いというものではなく、そのまましておくこと無意識に減っていくものという危機感をもっている間違いないかもしれません。ただ、各ご家庭に訪問するスケジュールもある程度にせよ、信頼関係を構築し続けるよう意識していなければならぬと思っております。また、施療効果(或いは満足度)とは信頼関係×手技力と私は考えており、信頼関係は手技力と同じ位に大変重要なものですが、手技とは違い、目には見えないもので、一般的に考えれば自分なりに誠意を尽くす以外ありません。またこちらが誠意に対応したつもりでもキチンと相手に伝わっているかどうかは分かりません。特に相手が高齢者の場合、耳が遠くて話の一部が聞こえていない、こちらが何気無く使った言葉が専門用語で理解していただけていなかったということもあります。

そんな中で編み出した苦肉の策?が「信頼関係を数値化する」という方法です。どのような方法かと言えば「一分間以内に患者さんから「そうですねですよ」という言葉を2回以上言っていたら、それを一つの指標にする」というものです。

私たち施術者と患者さんが会話をしている際「そうですねですよ」という言葉が相手から出る時は概ね以下の4パターンだと思います。①体の状態

を施術者が理解してくれていると思った時。②自分が話したことを施術者が理解してくれたと感じた時。③心の内を理解してくれていると感じた時。④上記三つの複合型。このような意味で患者さんが「そうですねですよ」と言ってもらえるように話の方向性を誘導し、また漫然と会話をすることを避けるため一分間という時間制限を自分に課しています。そのための方法は正攻法から姑息なものまで色々ありますが(笑)、読み手の皆さんは私と違い、真面目な方ばかりだと思っているので正攻法のみお伝えすることにします。

具体的には①セルフタッチをしない。②相手の話を映像化しイメージしながら聞く。③相槌を打つタイミングは、句読点のくる位置で行う。④相手の会話を要約する、或いは「それは〇〇ということでしょうか?」などと言いつつ換えながら質問する。その際、相手の会話のキーワードを必ず使用する。そして会話のスピードは相手の会話のスピードに合わせて。⑤相手の意見とこちらの意見をつなぐ際、文法的にまちがっていても接続詞は必ず肯定語にする。大まかな説明ですが、だいたいこういった流れです。

普段から意識して「要約力」や「言い換え力」を高めるように注意して、相手が「何を言わなかったのか」を考えてその背景に思いをめぐらせてから、「ええ方に考えて発言する」。そして「他には何かありませんか?」と聞き添え、話を広げるというのは、ちょっととした頭の体操にもなると思いますし、読者の皆さんが施術者でなくても他人と会話をする際に参考にしていただければ幸いです。そして結果的に少しでも他者とのコミュニケーションが上手いき、ストレスが減少すれば、ストレスからくる肩こり、腰痛などが減少するかもしれません。

あじさい日誌

第328回大倭会文化行事

秋の旅行のご案内

—紀州に自然と人々を訪ねる—

日にち 平成27年10月25日(日)～26日(月)

行き先 和歌山方面
いたきそ
 伊太祈曾神社・紀三井寺
みなかたくまくす
 ・南方熊楠顕彰館・道成寺

宿泊 ホテルシーモア(白浜)

費用 2万7千円

申込 10月10日までに湯浅芳郎へ

問合せ 湯浅芳郎 電話 090-6987-5847

7月10日 夕方、日本山妙法寺の平和行脚の一行8名が到着。拝殿前や東方碑の前で挨拶の後、宿舎の交流の家まで黄色の法衣でうちわ太鼓を鳴らしつつ行進。有志の接待で一泊されました。

7月12日 祝会。現実の問題で例えば親と子とか、一方の強い思いがもう一方には強いストレスになっている場合もあること等がテーマになりました。

7月15日 大倭神宮月次祭。
 7月23日 大倭大本宮月次祭。午後4時から大倭会館において大倭会役員会。8月の大本宮

の行事や秋の一泊旅行計画、文化講演会等の話し合い。
 8月1日 大倭病院設立28周年の記念日。午前10時から大倭病院守護神である東山坊大善神に対して日頃の感謝と安全を祈願しました。

都合により6日に、永年勤続者、佐藤優一郎さん(20年)・片山亜津美さん(10年)への表彰状が贈られました。

8月6日 大倭神宮月次祭。広島に原子爆弾が投下されて七十年……。

夜、大倭会館で邑倭の会。
 8月9日 長崎の原爆記念日、拝殿の太鼓が打ち鳴らされました。

午前8時から大倭墓地の掃除

と、9時半から紫陽花邑の大掃除が行われました。この日も酷暑真っ盛り、大半の方は昼まで作業を終えられました。皆さんお疲れ様でした。

昇ちゃん元気一杯。大掃除はちゃんと参加していました。

大倭安宿苑では
 7月25日 第39回大倭安宿苑夏祭り。多くの模擬店、ボランティアによる三味線・フラダンス、お宝さがしゲーム、カラオケ等を楽しんで、無事故で盛況の内に終了しました。暑い中、職員・ボランティアの皆さん、ありがとうございました！

(菅原園)

8月2日 4名が京セラドームのプロ野球オリックス戦観戦。

(須加宮寮)

7月28日 音楽の先生による音楽療法が行われました。

(長曾根寮)

7月16日(特養) 5名の方(内米寿・卒寿各1名)の誕生会。
 7月30日(デイ)以前、デイサービスを利用された方の娘さんによる舞踊ボランティア。

(茂毛路園)

7月13日 ボランティアさんによる今月の健康体操。

(八重垣園)

7月25日 大倭安宿苑夏祭りに多くの入居者が参加し、模擬店の買い物を楽しみました。お一人がカラオケ大会に参加し、みんなで応援しました。

ふと一息ついた時に、地元の小浜温泉で各々ホテルや旅館の女将さんが案内してくれたりするという「村おこし」ならぬ「温泉街おこし」の様催しが行われていた。それが「ジャカラダ祭り」であった。私が見たのは、雨に映える綺麗な紫色の花で、花びらから雨の雫が落ちているのを、なんとも愛おし



「ジャカラダ」(写真)が母の花になりました。(千)

あんない

*月次祭(大倭神宮)
 9月6日(日) 午後2時より大倭神宮にて。

*大倭会主催第560回祝会
 9月13日(日) 午後2時より大倭大本宮拝殿にて。

*月次祭(大倭神宮)
 9月15日(火) 午後2時より大倭神宮にて。

*月次祭(大倭大本宮)
 9月23日(水・秋分の日) 午後2時より大倭大本宮拝殿にて。

▼六月、母の見舞いに旦那と二人で長崎に帰省した。旦那のふるさとで見る橋湾が好きで、変わるこのないその海を眺めるのが毎回唯一の楽しみである。ずっと妹夫婦が母の世話をしてくれ、病院の泊まり込みも毎日妹がしてくれていたため、滞在中は私が代わって泊まり込みをした。

編集後記

先月号表紙写真について
 ハーリーとは
 600年程前、中国から伝わった伝統行事で、豊漁と航海の安全を祈願する海神祭として行われる競漕。奥武島のハーリーは、高さ3メートル程の橋の欄干から飛び込み舟に乗り込むので、特に迫力がある。インターネットで調べて、そんなことが分かりました。(編集部)

いい思いで眺めていた。
 母は六月二十六日意識の戻らないまま、帰らぬ人となりました。その時の雨は母の涙かと思いましたが、花びらから落ちる雫を見た時、母から「ありがとう、ありがとう。私が病床で頑張った分、これからは貴方たちがしっかりと頑張ってください」と言っているように感じ、「ジャカラダ」(写真)が母の花になりました。(千)